

『国産ジーンズの聖地』倉敷 児島

こじまじーんず ヒストリー

倉敷市茶屋町小
6年1組
宮本望那

リー・ヴァイ・ストラス
Levi Strauss

1829年
2月26日
1902年
9月26日



ります。

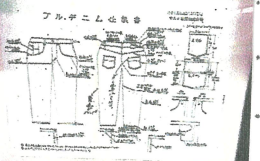
児島がジーンズの聖地と呼ばれるまで

私の住んでいる倉敷というまちには世界に通用すると言った過言ではない、ジーンズの聖地である「児島」というまちがあります。児島では昔から綿花の栽培が盛んに行われていた、木綿織業を発展させ、世界でも有数の繊維産業のまちとして認知されるようになりましした。

ジーンズの起源

1847年、カリフォルニアに金鉱(金)のたくさん採れる鉱山が発見され、ゴールドラッシュが始まりました。過酷な労働に耐えられない服を提供したいと、1853年にリーバイ・ストラスという人物がカリフォルニアへ移住してきます。とても有名なジーンズブランド「リーバイス」の誕生に繋がります。

当時に作られた仕様書
細い指示が書かれている



縫おうとすると、デニム生地を縫えるパワーツと針を備えたミシンが日本には無かったです。そこでミシン

第二次世界大戦後の日本は、素材不足により衣服が手に入りずらく、闇市で購入した様々な色の米軍古着が人気で、その中にジーンズがあった。繊維のまちとして学生服に代表される長い歴史と技術、販売網に優れていた児島でジーンズも自分たちで作れるのでは、と当時の人々は考えました。それは想像以上に険しい道で全く何もないゼロからのスタートだった。ジーンズをばらし、パーツごとに分解すると、思いもよらない数のパーツで、立体的に縫製されている事が分かった。独特な染め味の青い生地を出す事が難しく、染める方法が分からなかった。ジーンズの特長である厚みのある生地も当時の日本には存在せず、政府にかけあい、アメリカから生地を輸入する事にした。いざ縫おうとすると、デニム生地を縫えるパワーツと針を備えたミシンが日本には無かったです。そこでミシン

ジーンズと言えば 藍色



手洗をせず染め液を出るものは、科学的物質を使用していないから。

飛鳥時代に中国から伝搬した藍は全盛期の江戸時代には、日本全国で活躍し庶民の衣服を美しい藍色で染めていた。しかし太平洋戦争中、国策により藍は禁止作物に指定され、また戦後に化学染料が入ってくる、藍農家が激減してしまい一時は途絶える寸前まで衰退した時もあった。布地を染液に浸し、空気を含ませ発色させる。この工程を何度繰り返すことで徐々に濃い色になる。仕上げに濃い色に仕上がる。

飛鳥時代に中国から伝搬した藍は全盛期の江戸時代には、日本全国で活躍し庶民の衣服を美しい藍色で染めていた。しかし太平洋戦争中、国策により藍は禁止作物に指定され、また戦後に化学染料が入ってくる、藍農家が激減してしまい一時は途絶える寸前まで衰退した時もあった。布地を染液に浸し、空気を含ませ発色させる。この工程を何度繰り返すことで徐々に濃い色になる。仕上げに濃い色に仕上がる。

児島で完成した
国産ジーンズの
第1号



ラボウ(倉敷紡績)がデニムの開発に着手し、複数の企業協力のもと国産初のデニム生地を完成させ、日本のジーンズ産業は更に飛躍する事になった。

や系、リベットもボタンもファスナーも日本には無く全て輸入で必要な物をそろえた。

ついに国産ジーンズの誕生

1964年にマルオ被服(現ビッグジョーン)がアメリカのキャントン社から生産販売権を取得し、翌1965年春に試行錯誤の末、国産初のジーンズを児島で完成させた。

最後に、児島ならではのアイディアと地域の人々の努力から出来たジーンズだといふ事を学びました。自分の住んでいる町にこんな素晴らしい歴史があるのは、とても嬉しい事です。

児島で生まれた物!!

縫製工程は20~30台のミシンを使い、今は1日100本前後のジーンズを作っている。当時、中古加工に使っていた大型洗濯機

CADというパソコンソフトを使い、後、裁断機のパソコンヘデータを送り機械で裁断している。

昔はパーツを生地の上に並べ、人の手で裁断していたが今はCADというパソコンソフトを使い、後、裁断機のパソコンヘデータを送り機械で裁断している。

当時の、パーツを並べ1枚1枚裁断するようす

ベティスミス工場見学へ行ってきました

現在の藍染めは、天然の素材、手仕事の魅力が見直されていく一方で、一部には化学薬品を使用した藍染めなども存在し、昔と変わらな

現在、藍染めは天然の素材、手仕事の魅力が見直されていく一方で、一部には化学薬品を使用した藍染めなども存在し、昔と変わらな



ジーンズミュージアムも行って、ジーンズ作り体験